

令和 2 年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

今年度の重点目標として、①集団の中で、一人一人が主体的に取り組む姿を目指す学習指導の充実(小学部)、②挨拶を自分から進んで行う力の育成、③教員のICT活用能力の向上、の取組3項目を挙げた。

重点項目の評価については、「8 学校アクションプラン(様式5)」に記載のとおり、達成度及び具体的な取組状況から総合的に判断して、3項目全ての取組において「達成した」とした。

学校評議員からは、重点項目について「具体的な取組状況から、重点項目はそれぞれの当初の目標を達成している」との評価をもらった。また、各重点項目について「主体的に学ぶことを目指して支援を行い、『～したい』『～したいのだろう』が分かる子に育つように、継続して支援することが大切である。」「児童の実態、生活年齢に応じて学習内容を設定し、PDCAサイクルで授業改善が行われ、研修もされていてよい。」「挨拶運動というイベントから日常生活の挨拶につなげていくことが必要である。」「学校で挨拶ができるようになったら次は学校外でも知っている人に会ったらあいさつをすることを教えたらよい。」「知っている者同士の会議や研修会はリモートでも有用だが、子ども達は十分なリアルな体験があってバーチャルが生かされる。」「使いこなすことができればとても有用な物だと思うが、得手不得手があるので使い手に支援が必要である。」など貴重な提言をもらった。

7 次年度へ向けての課題と方策

学校評議員からの提言をうけて、次年度に向けては次の課題について取り組むこととしたい。

- ・ 「遊びの指導」での授業づくりの成果と課題を生かしながら、各教科や「生活単元学習」「日常生活の指導」等の各教科等を合わせた指導において、授業づくりの充実を図る
- ・ 毎週○曜日は挨拶運動の日とするなど年間を通して取り組み、自分から挨拶をする意識と習慣をより定着できるようにする。
- ・ 授業でICT機器を活用していくために、より詳しい情報や新しい情報、教員の疑問点等に、素早く対応できる体制を整える。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和2年度 にかわ総合支援学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（小学部）
重点課題	集団の中で、一人一人が主体的に取り組む姿を目指す学習指導の充実を図る。
現 状	<p>昨年度は、新学習指導要領における育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づいて「主体的に取り組む姿」の共通理解を図り、授業実践をおこなった。授業の中で「学習の意味づけ」や「目標設定確認・振り返り」の学習活動の設定の工夫を行い、児童が意欲的に学習に取り組む姿が多くみられた。</p> <p>今年度は、昨年度の研究成果と課題を踏まえ、各教科等を合わせた指導や教科などの授業について、観点別学習状況の評価に基づき「教師のための授業改善ポイント」を活用しながら、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業づくりを行いたい。</p>
達成目標	学部全体で検討する2つの授業に対する授業づくりの検討会の実施回数 1 授業に対し3回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none">・目指す児童の姿を実現するために必要な学習内容等を教科等横断的な視点で確認し、年間指導計画の見直しを行う。(年2回)・研究グループは、1・2学年、3・4学年、5・6学年グループとする。各グループで前期1授業、後期1授業を取り上げ、授業づくりを行う。その中から前期・後期各1授業を学部全体で検討する授業とし、授業参観及び協議検討などを行う。対象授業以外の学年グループは、対象授業の成果を生かした授業づくりを行う。・授業研究は、学部検討会①（指導案検討）→授業→学部検討会②（事後研修会）→授業改善→授業→学部検討会③（事後研修会）の流れで行う。
達成度	学部全体で検討する3つの授業に対して各3回以上検討会を行った。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none">・年間指導計画において、学習指導要領との整合性や学習内容の配列、実施時期等の確認を行い、他学部との調整を図りながら、令和3年度用の年間指導計画の作成、見直しを年3回行った。また、遊び、音楽、体育の隔年の年間指導計画を作成した。・各学年・グループで、「遊びの指導」について、学期ごとに1授業ずつを対象授業とし、学年教員全員で、定期的に児童の様子や行動等の観察、評価規準に基づく評価を行うなど観点別学習状況の評価を生かし、授業改善を図りながら授業づくりを行うことができた。・前期は3、4学年「夏祭りで遊ぼう」、後期は1、2学年「こぶたランドであそぼう」(学校訪問研修指定授業)、5、6学年「光と影のキラキラランド」(授業研究会)の計3授業を学部研修対象授業として取り上げ、指導案検討、授業参観後の事後研修会、授業改善後の授業参観、事後研修会等を行った。授業参観後は、発達段階ごとの各グループの対象児童を中心に、評価規準に照らし合わせて観点別学習状況の評価を行った。また、学部研修会では、学部教員全員を3～4グループに分け、付箋を活用し、児童の具体的な発言、様子等をもとに、目標を達成するために、学習活動や展開、支援環境等についての改善案について、検討や意見交換を行った。各学年・グループでは、学部研修会での意見等を生かして授業づくりを進めた。
評 価	A 授業づくりを進めた結果、各授業の目標をおおむね達成することができ、児童は、授業で学んだことを生かして他授業や家庭等で主体的に取り組む姿が多くみられるようになった。
学校関係者の意見	主体的に学ぶことを目指して支援を行い、継続することが大切。児童の実態、生活年齢に応じて学習内容を設定し、PDCA サイクルで授業改善が行われ、研修もされている。
次年度へ向けての課題	各教科等を合わせた指導「遊びの指導」の授業づくりの成果と課題を生かしながら、小学部の児童の実態や生活年齢等を踏まえ、各教科や「生活単元学習」「日常生活の指導」等の合わせた指導において、低学年から高学年まで一貫した授業づくりの充実をいかに図り継続するかが課題となる。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	学校生活（生徒指導部）	
重点課題	挨拶を自分から進んで行う力の育成	
現 状	挨拶することはコミュニケーションをとるために大切な一歩であり、「誰とでも、どこでも、そして自分から」を目標に毎年挨拶運動を実施している。挨拶運動後は挨拶する姿が見られるが、時間経過とともに挨拶する児童生徒が少なくなっており、昨年は年間4回の挨拶運動を2回増やし6回実施した。大人が挨拶をすると返してくれる児童生徒は増えたが、自主的な挨拶をする児童生徒は増えていない。	
達成目標	児童生徒会主体の挨拶運動の実施	児童生徒会執行部と教員による評価の向上
	年6回以上（4・6・9・10・1・2月）	「良くなった」が70%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・全校集会で児童生徒会執行部が挨拶運動を周知する活動を行う。 ・児童生徒会執行部が全校放送を使い、挨拶運動に合わせて挨拶の啓蒙を行う。 ・挨拶の大切さを訴えるポスター作成を募集し、掲示する。 ・進んで挨拶しているか、学年や学部を超えて挨拶しているかなどのアンケートを第1回挨拶運動前、中間に行い、評価向上がみられない場合は執行部と対策を考え実施する。 	
達成度	4回実施した。 4月は休校中、6月は県からの指導により3密回避のため実施できず。	「良くなった」90%以上
具体的な取組状況	<p>9月、10月、1月、2月に実施した。</p> <p>児童生徒会執行部による広報活動実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全校集会で、挨拶運動について全校児童生徒に周知 ・児童生徒会でポスター制作・掲示 	<p>児童生徒会の執行部の話し合いは県からの指導により9月から実施。前期執行部で1回、後期執行部で5回実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期は挨拶運動の実施についての共通理解。 ・後期は挨拶運動の実施方法や広報の方法を検討し実施。 <p>アンケートは、9月の挨拶運動後に教職員対象に1回実施した。（回収42、良くなった29、大変良くなった8）</p>
評 価	A	進んで挨拶するための工夫点を児童生徒会執行部で話し合ったり、話し合ったことを全校に伝えたことで、執行部以外の児童生徒も自主的に挨拶運動に参加したりする姿がみられた。以前よりも挨拶がよくなったと実感する児童生徒がほとんどであった。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶運動というイベントから日常生活の挨拶につなげていくことが必要である。 ・学校でできるようになったら、次は学校外でも知っている人に会ったらあいさつを、そして大人になるにつれてTPOに応じた挨拶をできるように。 ・会社で来客から挨拶を褒められたら、社員に伝えている。大事なことだと思っている。 	
次年度へ向けての課題	<p>今年度、児童生徒会による主体的な取り組みとして成果がみられたが、児童生徒会執行部が集まる機会が多くとれなかった。</p> <p>執行部が率先してアイデアを提案していく形は継続しつつ、例えば毎週月曜日は挨拶運動の日とするなど年間を通して取り組むことで、自分から挨拶をする意識と習慣をより定着するようしていきたい。</p>	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

重点項目	その他（情報図書部）	
重点課題	教員のICT活用能力の向上を図る。	
現 状	<p>富山県のICT教育推進事業により、昨年度3学期にiPad20台が配備されICT機器の整備が進んだ。各学部に分け、授業で使用し始めているが、教員の得手不得手もあり、教材の提示手段としての活用が多い。今後の使用に関して、以下のような課題が考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の実態に合わせた活用 ・学習目標の達成につながる活用 ・児童生徒が自分で使うこと 	
達成目標	ICT活用能力の向上を図る研修会の実施回数 年間3回以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・教員のICT機器利用に関する情報の収集と教員から活用にあたってのニーズの調査を行う。 ・調査した結果に沿って、「基本操作編」「授業でのアプリ活用編」等、目的別に内容が異なる研修を7～8月に実施する。 ・先進的な実践校の情報を収集・分析し、本校で活用できる内容を精選して校内で伝達する。 	
達成度	4回実施	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・実技研修会を夏季休業中に、4回実施した。 ・タブレット端末の活用能力の向上を目的に「タブレットを活用しよう」を各20名の参加で3回実施した。 ・リモート授業を体験することを目的に、「リモート授業（リモート会議）をしよう」を約20名の参加で1回実施した。 	
評 価	A	タブレット端末活用の研修を通して、多くの教員がアプリの基本操作と授業での活用方法を理解することができた。また、リモート授業を体験することができた。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・元々知っている者同士の会議や研修会はリモートでも十分できるが、初めて会う人たちとは難しいところもあると思う。リアルとバーチャルの併用が必要である。子ども達は十分なリアルな体験があつて、バーチャルが活かされるのだと思う。 ・使いこなすことができればとても有用な物だと思うが、得手不得手があるので使い手にそこまでの支援が必要であり、物だけ先にあつても子どもの楽しみに使うだけで終わってしまう心配がある。 	
次年度へ向けての課題	<p>タブレットの活用能力の向上に必要な基本的知識を教員が習得することはできたが、実際の活用では児童生徒の実態に応じて使用するアプリや活用方法は多種多様であり、授業ごとに異なる。</p> <p>今後、授業で活用していくためには、より詳しい情報や新しい情報、教員の疑問点等に、素早く対応できる体制を整える必要がある。</p>	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）